

5月25日 村民との対話 Cグループの報告

飯舘村村民： 佐藤聡太（宇都宮大学農学部4年生）三瓶政美（いいたてホーム施設長）

参加者：35名前後

Cグループは、村民代表の20代の佐藤聡太さんが復興の姿として描く飯舘村―“老人天国”（高齢者を受け入れる村）―をプレゼンした。次に50代後半の三瓶政美さんが、全村避難のなか村に踏みとどまって暮らしている高齢者の施設「いいたてホーム」の実態と将来を語った。そのあと参加者はポストイットに意見を書き込み、それらはボードに貼り付けられた。類似した意見をグループとし、キーワードをつけた。討論はこれらをもとにして行った。参加者数が多いため、終わりの30分は3グループに分かれての議論となった。

キーワードと参加者の意見

1. 老人天国

- 歴史は2万年前からある。縄文人が好んで住んでいた村である。人口は高齢化が激しく進んでいる（事故後）→「老人天国は飯舘村には適しているかもしれない」
- 精神障害者だけの“天国”はあり得ないと同じで、老人天国はあり得ない。お年寄りが住める条件は老人以外の者との交流。その交流がどうできるかが問題。
- 老人の生活の基盤をどう考えるか。老人が持っている資産（年金を含め）をあてにするのか
 - ◇ 老人が入りたくなる魅力づくり。前期高齢者は大変元気な人もいる。が後期は個人差が激しい。この対応策が必要。
- 健老者活躍の場として、農業フィットネス、花園造りなど

2. 医療、住環境、いいたてホーム

- 厳しい気候でもある飯舘村で高齢になっても住み続けるには訪問医療・訪問看護が必要
- いいたてホームは大事。高齢者施設で10年過ごすことになる。ここが幸せになるように、老々介護がよいと思う。
- 施設が格安では入れるのであれば、メリットが大きい
- 都会、県外からの移住者と現地住民とのよい関係を築く工夫。サービス付き共同住宅はいいアイデア。だが、どう都会、他県から呼び込むか。元気のある60代に魅力を持たせ引きつけるには？

3. 食の安全と放射線

- 現在ハウス栽培などの実験をやっており、食べられるものが生産されると思う。したがって、飯舘村に住めるだろう。
- 老人が生活をする場合、若い人（孫や子）が遊びに来てほしい。放射線汚染があるときてくれないのでは？

4. 文化・伝統の継承

- 伝統継承の場。飯舘村行事・神事。木彫。石彫。
- 高齢者の知識と技術を生かし、「〇〇学校」「〇〇塾」を開校。村外から受講。→生活技術の継承、生活文化の伝承

5. 生産的なこと

- やはり何か生産的なこと（野菜づくりとか）

6. インフラ

- 死ぬ直前まで元気で暮らせるインフラ（前向きな介護予防・健康増進・生きがい作り・終活）整備に特化したサービス拡充を図っては。

7. コンペ

- 長野県は都会人がセカンドハウスを持ちたくなるようなコンセプト創りに成功した県。飯舘村も県内外から移住してみたいと思わせるコンセプトを創りあげるためのコンペを全国から募ったらどうか。

文責 中町英佐子

注：この報告書に全参加者の意見を書ききれず、かつキーワードは分科会会場でのキーワードとは若干異なっています。